

基調講演

里山 里地 里海から持続可能な社会を考える

日時：平成27年7月11日（土）

講師：あん・まくどなると（上智大学大学院地球環境学研究科教授）

概況



平成27年度期「あいち海上の森大学」が7月11日に開校し、記念講演が行われました。

開校式・開講記念講演が愛知県立大学多目的ホールにて開催されました。開校記念講演では「里山 里地 里海から持続可能な社会を考える」をテーマに、上智大学大学院地球環境学研究科 教授のあん・まくどなると氏にご講演いただきました。

始めにあん氏の生い立ちや来日のきっかけから、フリーライターとして全国の農村・漁村を歩いたことなど、日本における様々な活動についてお話されました。概要は以下のとおりです。

環境問題についてみると、海で発生している問題は全てが海の中だけでなく、陸からも来ている問題で、陸での活動が海に影響を及ぼしている。日本はここ50年間で社会が大きく変わり、社会が変われば人間と自然との関わりも変わる。都市化の中で、農村漁村から人が出て行き、田舎では高齢化が進んでいる。二次的自然に着目すると、人の手が入らなくなり多様性が失われるため、ある程度人がいたほうが良いが、全国的には生態系サービスが衰退している。

海外に目を向けると、「GIAHS（世界農業遺産）」という制度があり、世界的に重要な農業資産システムの保全と順応的な管理をしている。当時は発展途上国対象であり、発展途上国の小規模農業は伝統農法に依存している。伝統農法のほうが持続可能性など「芯」があり、環境問題など様々な問題を考えると、伝統農法を活かして活用したほうがよいが、資金面の問題もある。フィリピンや中国などの事例をみると、ユネ

スコ世界遺産に認定されてから観光化が進み棚田が衰退したが、GIAHSに指定されてから回復したケースや、食糧供給問題の解決の1つとして田んぼに魚を育成する伝統農業によって食糧確保できたケースなどがあり、ランドスケープを活用することや、伝統農業を完遂することが大切である。

また、日本における石川県能登の取組、宮城県での仕事、佐渡の仕事の実例では、昔のものを活かしたままで未来に向けて再生していくこと、環境教育は子どもの頃から始め、人間活動だけでなく自然界をみることが重要である。そのうえで、陸と海のつながりの大切さや、古い知識を活かしながら新しい発想をすること、文化保全と環境保全を一緒にする工夫をするなど、維持管理のために角度や切り口を変えること、色々な人達と交流しながら次の世代へ託していく必要がある。